

絵画の構造は、いままでも何度も手を変え品を変え、なまぐさくように様々な表現が試みられている。西洋美術は変化を求めてきた。表現する欲は貪欲であるが、しかし基本的な形態理論は残っており、結果として何回も同じ形態を、幾人もの画家が繰り返し用いている。それらの変化が、繰り返しであるにもかかわらず、無意味なものにならないのは、形態に対しての意味付けが各々の場において違ったものでもあったからであろう。形式主義はそういう意味づけを否定して、合理的思考によって絵画を客観的対象として捉えようとするかゆえに表現の狭小域におちついてしまう。論理的思考は、科学によって有効である。しかしその適度と科学的思考の制限を必要とする。ただ同じことを盲目的に繰り返しても、それは小さな変化であって、実際に停滯不前にならないだろう。もし大きな変化を求めたならば、一旦完全に停止し、状況を把握し直し改めて飛躍を求めねばならない。

方法論、空間性、素材など現代の絵画はあらゆる要素を検討するが、美術は分析することによって新しいものや生まれるものではない。絵画とは思想と審美の結果、論理の塊である。世界観を示すことは、主観と共に客観的な視点にも必要とする。もちろんその場合、分析的で明確な論理を提示することは不可能だ。つまり、その存在の確証は観念的なものにある。例えばそれは宗教において神の存在の是非を問うことが、宗教の本質を問うことに似ている。その存在を信じるかどうかは、あくまで個人の理解が、その存在を必要とするかどうかにかかるとは、信心は自由であり強制されるべきものではないと同様である。芸術は客観的な視点によって分析することは可能であるが、最終的な判断は強制ではない。それは近代主義絵画が否定してきた、意味なもの、つまりイリュージョンを意味する。

端的に言って近代主義絵画の歴史は形式主義が中心である。反形式主義の絵画は存在しても、それはあくまで形式主義への反応、あるいは批判的なものではない。そして形式主義における構造は、作品として最も重要な主題であり、意味づけの意図内容は思いや等しいものである。しかしけがらぬ絵画作品は、その構図の質によって評価されるものであり、構造とそれは表現するための技術でしか有り得ないはずだ。形式主義においては、絵画作品を客観的存在として捉える態度によって、美術を特異と即興として考えようとする。それは極端な話、宗教が神の存在を特异的に立証しようとするのと同様は無意味かつ無謀なことである。したがって近代主義絵画の歴史は受容されて、そこで秩序化された形式主義の統制、すなわち絵画の自己目的化という観念に縛られる必要性はない。そして自己の世界観をあらわすことが、自律性よりも優先されるべきものである。だが自律性の問題は、実際に、個々の画家の価値観とより世界観が如何に現れるものだと言い換えることもできる。なぜならそれは、様々な在り方であり、その範囲は多岐にわたるからである。

この様に美術の存在意義は宗教と対峙したものである。ただし、もちろん美術を宗教と同一のものとして考えるのもまががっている。絵画に対して宗教的アプローチを行うのは、すなわちその達成の境界線を拡張化することになるに過ぎない。近代以前において、絵画の主題は多く宗教的題材に求められていたが、それは宗教が持つ特異内容を、架空的存在として絵画構造に表すことに実質的意義があったためである。しかし現代において宗教的イメージを絵画の主題とすることは安易かつ危険であり、宗教は、あくまで潜在的存在としてあつたほうがより絵画表現にとって有効である。おそらくこの複雑な世界を完全に表すことは不可能であり、それを無意味ならわすことすなわち、美術を捨てることで解決しようとするらざるを得ない。しかし絵画は、一人の画家の知的思考と感性の結果としてより個人的な神髄と表現としても、多くの人々の関心を引き起こす可能な表現分野である。

II

絵画は閉ざされたマイクロコスモスである。それは自閉的で、その中で作られる法則は外部から拘束される必要はない。また古典絵画の空間表現は秩序と外部との関係によって成立させようとしたものにほかならない。絵画構造には、画面全体から受ける存在において、二種類の基本的要素が作用しうるように思われる。それは図形、点線、面線であり、それぞれそのイメージが場面を支配することによって統一性は確保される。図形は、その外形によって描かれたものの動力を凝縮している。図形は、一見、安定した図形であるように思われるが、その安定は動的な均衡の上で成り立っている。動機は過程であり、見る者に不安な感情を起させるが、それは抑圧からの暴力的解放を意味する。もし一つのイメージの中にほかのイメージが投入されれば、その場合どちらか一方がもう片方のイメージに吸収されるわけではない。そうでなければ、それは本質的な世界観として成り立つ。単にデザイン構図でしか有り得ない。もちろんデザインがすぐれた世界観が読み出される可能性があるが、それはデザイン本来の目的、つまり人目を引きつけることとイコールで結ばれるわけではない。であるなら、そのようなデザイン化された絵画を新しい世界観と考えるのであれば、我々は絵画の基本的正確を見失うことになる。なぜ

なら、それは絵画に対するアイロニーだからだ。現在の様にアーティストのような時代においては、アイロニカルな姿勢を持つことに有効性があるのを認めるを得ない。しかし、だからといってその状態がいつまでも続くわけではない、また甘んじて充足することも不可能である。

絵画の統一性はと、えられた内容の相対的な位置関係によって導き出されるものであり、それはおのずから有機的なものであらねばならない。したがって一つの全体イメージが他のイメージによって無材料に侵食されることは、画面が多くの線の集合によって認識されることとなり、個々の内容の連続性が失われる。統一性の問題を語ることは古典絵画の未考のみから望むことであり、イメージの問題は直接に問題にする。だが何々年間の構造とそこに形態に對して常に意味を求め、抽象表現であっても具體的意味内容に結び換える努力がなされる。それは時に意識的解釈でありながら、それととも本質的に意味を求めようとする。となれば構造は潜在的に絵画に付随した要素である。故に構造は意味に所属する。自律性は、そういったイメージが充分つたような状態においてはじめて成立するのであり、ある意味で動的な構造ではない。

例えばジャクソン ポロックの絵画からオールオーバーという概念が生まれただけであり、オールオーバーという概念自体に必然的理論はない。しかしポロックが何世紀にもオールオーバーと言えよう絵画を制作したものは第一期に過ぎない、つまりそこは、ポロックが、オールオーバーは自分の絵画にとっては表現の可能性がないことを直感したからにはならない。それは彼にとってオールオーバーの概念を作品に表現すること何かなのでなく、自分の絵画イメージを表現する過程においてオールオーバーという形式の可能性を無理に押し過ぎないからである。であるからしてオールオーバーという構図は一つの全体のイメージをあらわすための便宜的なものであり、決してそれのみが究極的な絵画表現ではない。だが形式概念は、その成功点から批判対象として作品が自立し、観念的価値になりうる。また、他の抽象主義と対峙している画家の作品をオールオーバーだと考えるのも偏狭的である。それは、オールオーバーという概念を絵画構造のつ特徴な表現という本来の位置から、一般的な観念的汎用価値に拡張せよとする作為的な見方である。故ららるって形式は、個々の画家が各々の内的イメージを模索した結果であり目的ではない。しかし形式は目的化された図形においてその力を失う。そしてその図形から実質的なく空間なデザインと化す可能性が出てくる。

概念化したオールオーバーの概念を批判的に解釈したのがニルムラドだが、そもそもオールオーバーは経験から導き出されたもので、観念的に解釈されるべきではない。なぜならその状態は、作品が周囲の空間に開放性を保つことによって生きているのだからである。ミニマルイムは絵画を恣意的に還元し、たんなる物体でしかないしと考える。そしてイリュージョンは現実に存在しない不透明物として解離しようとした。しかしそれは経験に根拠したものであり、観念的思考の陥穽である。実際にはイリュージョンは存在する。それは現実ではないが、現実がいつまでも抑えようする手段のないものとしてある

表へは、動機は手付がなない、その存在を認めるを得ないような存在を知っている。それはその存在を否定すればよいとそれを確認してしまうような事柄だ。だから存在を肯定したとしても、存在の証拠はいつか見られなくもならない。むしろそれは肯定さればするほどまがましい、インテリキルもののように感じることが出来る。それはその対象が現実ではないからだ。

よく知られているように、古典的なイリュージョンはリアルネスに完成された。その過程において事実を代替するものを作り出すのだと考えられる。つまりそれができるまで事象以外には何もなかったからである。ゆえにそれが目の前に現れたとき、人々はそれを事実を裏すのだと感嘆し、熱中した。いやいやに踏踏しようとする力だといふほどが明確かも知れない。だがその努力はあきらめ、十九世紀には実用に変わり、二十世紀にはその存在を否定しようとはならなかった。しかしそれは誤った認識で、やはりイリュージョンは存在するとしなければならぬ。それを否定するに於いて、

絵画作品を物体としてみることは、まわりとの関係性を排除しかるべきであり正しい。ただしそのような絵画は、実際に存在しない。具体的な事例として存在しないにもかかわらず、イリュージョンを経験するということは、正解にはイリュージョンの存在を否定するような諸々の条件があるということだろう。わたしは極めて古いものはイリュージョンを否定することに於いてイリュージョンの存在を暗にほめたような表現である。それを素直にすれば、意図的にはなく無意味のうちに表現できれば素晴らしい。